

澁澤青淵先生旧詩

内山峽

後学 木内敬篤 解説

内山峠の碑

渋沢青淵先生内山峠之詩の拓影

澁澤青淵先生内山峠之詩  
襄山婉蜒如波浪西接信山相送  
利成刀陰就中内山峠天然崔嵬如  
楓草路程小春初八好風景蒼松紅  
肩書攀嶧嶧涉攀益深險彌詭奇  
巖怪石磊磊橫勢衝青天攘臂躋奇  
氣穿白雲垂手征日亭未牌達濃  
頂四望風色十分晴遠近細辨達絕  
頂四望風色十分晴遠近細辨達絕  
與淡幾青幾紅更渺茫始知壯觀  
存奇險探盡真趣游子行恍惚此  
時覺有得慨然拍掌歎一聲君不  
見遁世清心士吐氣吞露求蓬瀛  
事誤終生大道由來隨處在天下  
事成於誠父子惟親君臣義友故  
相待弟與兄彼輩著眼不到此可  
憐自甘拂人情篇成長吟澗谷應  
風捲落葉滿山鳴

昭和十五年十一月廿四日建之

後學木内敬寫謹書

岡木作次  
岡木作次  
岡木作次

## 渋沢青淵先生之巖碑(副碑)

子爵青淵先生十九歳にして内山峠を過り絶勝を嘆賞して此詩を賦せらる。一誦して九十二歳の終生を一貫せる道徳經濟合一の大義が既に此の時に胚胎せるを知るべく、再吟して明治・大正・昭和に亘り一世に高かりし功業徳望の由來する所を感得せすんばあらず、因て郷人有志相謀り、茲に巖碑を鑿立して景仰の意を致すと云

昭和十五年十一月廿四日

顧問	東京市	伊藤松宇	小諸町	小山邦太郎
	野沢町	並木齡輔	白田町	井出今朝平
	三岡村	塩川正巳	岸野村	木内政蔵
	平賀村	鈴木覺治郎	東京市	三石勝五郎
主唱者	内山村	岩崎寛	胱水代表	中山茂治
	平賀村	小林義助	胱水代表	竹花喜三郎
	内山尋常高等小学校長		武者八郎	
副碑撰文	小林義助			
執筆	八十二翁			
	伊藤松宇			

彫工 岡本作次

(渋沢青淵先生之巖碑(副碑)とは、「内山峠之詩」が刻まれた巨大な石碑の右側に小さな石碑があります。そこに地元関係者が由来を刻みました。)

# 内山峡

渋沢青淵

襄山蜿蜒如波浪  
奇險就中内山峡  
刀陰耕夫青淵子  
小春初八好風景  
三尺腰刀涉棧道  
涉攀益深險弥酷  
勢衝青天攘臂躋  
日亭未牌達絕頂  
遠近細弁濃与淡  
始知壯觀存奇險  
恍惚此時覺有得  
君不見遁世清心士  
又不見汲汲名利客  
不識中間存大道  
大道由來隨处在  
父子惟親君臣義  
彼輩著眼不到此  
篇成長吟澗谷忘

西接信山相送迎  
天然崔嵬如刌成  
販鬻向信取路程  
蒼松紅楓草鞋輕  
一卷肩書攀崢嶸  
奇巖怪石磊磊橫  
氣穿白雲垂手征  
四望風色十分晴  
幾青幾紅更渺茫  
探盡真趣游子行  
慨然拍掌歎一声  
吐氣吞露求蓬瀛  
朝奔暮走趁浮榮  
徒將一隅誤終生  
天下萬事成於誠  
友敬相待弟与兄  
可憐自甘拏人情  
風捲落葉滿山鳴

昭和十五年十一月廿四日建之

後学 木内敬篤 謹書

## 「内山峠之詩」訓読及び注解

木内敬篤

裏山蜿蜒として波浪の如く、西の方信山に接して相送迎す。  
奇險就中内山峠、天然の崔嵬剝り成すが如し  
刀陰の耕夫青淵子、販鬻信に向つて路程を取る。

小春初八好風景、蒼松紅楓草鞋輕し。  
三尺の腰刀、棧道を涉り、一巻の肩書崢嶸を攀づ。  
涉攀益深險弥酷しく、奇巖怪石磊磊として横たわる。

勢青天を衝いて臂を攘げて躋り、

気は白雲を穿つて手に垂して征く。

日亭未牌絶頂に達し、四望風色十分晴る。

遠近細かに弁ず濃と淡と。幾青幾紅更に渺茫、

始めて知りぬ。壯觀の奇險に存するを。真趣を探り尽して游子

恍惚として此時得る有るを覚ゆ、慨然掌を拍つて歎ずること

を。

又又見ずや汲汲名利の客、朝奔暮走浮榮を趨うを。

中間に大道の存するを識らず、徒らに一隅を將つて終生を誤る。

大道は由來隨處に在り、天下万事誠に成る。

父子は惟れ親く、君臣は義、友敬相待つ弟と兄と。

彼輩著眼此に到らず、憐む可し自ら甘んじて人情に払るを、

篇成つて長吟すれば澗谷应え、風は落葉を捲いて満山鳴る。

昭和一五年十一月

木内敬篤 謹書

### 詩句の説明

○裏山（じょうざん） 上毛（上州）の山。裏は上に通ず。「のぼる」の義

○蜿蜒（えんえん） うねりゆく貌。うねうねとして

○崔嵬（さいかい） 全体石より成りて土を戴く山。いしやま

○剗（がん） けずる。削。

○刀陰（とういん） 刀は刀祢（とね）の略。陰は水の南の義。即ち利根川の南。

○耕夫（こうふ） 農夫。

○青淵（せいえん） 渋澤翁のこと。自宅後方沼のある地、淵上から号した。

○販鬻（はんいく） 販はあきなう。鬻はひさぐ。

○小春（しょうしゅん） 陰曆の十月の称。

○初八（しょはつ） 月の初めの第八日。

○腰刀（ようとう） 腰に佩びる刀。

○棧道（さんどう） 棧は棚、棚を懸絶の処に施して通行せしめる事。か

けはし

○肩書（けんしょ） 肩にかけたる書冊。

○崢嶸（そうこう） 高く険しい貌。

○涉攀（しょうはん） よじのぼること。

○磊磊（らいらい） 石のゴロゴロと聚る（あつまる）貌。

○攘臂（ひじをかかげて） 腕まくりをすること。

○躋（のぼる） のぼる。

○唾手（つばす） 手につばきす。勢いよく仕事に取り掛かるにいう。

○征（ゆく） ゆく。

○日亭（につてい） 日輪（太陽）の宿駅。日の亭次。即ち日脚。

○未牌（びはい） 未（ひつじ）の刻。現在の午後二時。牌は標示の札のこと。

○渺茫（びようぼう） 広く遙かなる貌。

○恍惚（こうこつ） うつとりとしたる貌。

○蓬瀛（ほうえい） 蓬萊と瀛州と。共に神仙の住するところ。

○汲汲（きゅうきゅう） 酒齶（あくせく）する貌。

## 現代文訳

## 木内敬篤

上毛の山うねりうねつて波の如く、西の方遠く信濃の山に連なつて、相送りつ相迎えつして居る。

而してその中で最も奇らしく險しいのは即ち内山峠である。天然の岩山が恰も削り成したるが如く至奇至妙を極め居る。

刀根川南の農夫我れ青淵、商用を以つて信濃に向つて旅程を取つた。

時は恰も十月八日の好時節。山は蒼い松と紅の楓と相映え發して見る目を悦ばしめ、脚絆草鞋の足取りもおのずから軽やかに、

腰に三尺の刀、肩に一巻の書、悠々として棧道を涉り、嶮しい岩を攀じ登ること益々深くなるにつれて險阻は弥々甚だしく、珍しい巖、不思議な石がごろごろと横たわつて居る。

意氣青天を衝き、詩心白雲を穿ち、腕捲りして攀じ登り、手唾して進みゆく。

かくて未の刻限(午後二時)頂上に達し、乃ち眸を放てば、四望隈なく晴れ渡り、遠近細やかに濃淡を弁つることが出来、更に青い松林や紅のもみじの谷が涯もなく打続いて居る。

是に於いて始めて壮大なる眺めの、奇しく險しい中にあることを知つた。かくて眞実の風趣を存分に味わひつとも旅の子我は更に歩みを進めて行く。

此の時、忽焉として胸中に閃くものがあつた。

慨然として掌を拍つて感嘆すること一声。乞う見よ。夫世を遁れて独り心を清くし行い澄まして居る士を、

彼等は徒に氣を吐き露を呑んで只管に神仙の境に憧れて居る。

しかも又一方には専ら名利に汲々として日も是れ足らざる徒輩がある。

彼らは朝に夕に東方西走して徒に浮雲の榮耀榮華を趁うて居る。

かくて與に共に中間におのずから大道の存するを知らず、相率いて一隅を取つて、あたら一生を誤り暮らしてしまつ。

抑も大道は固と到る所にある。而して天下の万事はただ義に由り、兄弟の間はただ友と敬に由る。

然るに前二者は悲しいかな、着眼此處に及ばず、憐れむべし、自ら甘んじて、この人情の自然に戾つて居る。

誠に以つて歎かわしい極みではないか。

茲に、この長詩が成つて即ち高らかに吟じて上ぐれば、声谷々に木靈し、

風は落葉を吹き捲つて、満山にざわざわと鳴り渡るのである。

## 予瀝（こぼればなし）

木内 敬篤

○是実に後年我が実業界の大元勲たる青淵渋沢栄一先生が弱冠十九歳の作である。時は安政五年、新時代の波がひたひたと旧日本の足許に押し寄せて来て、世は將に覺醒の第一晨に入らんとしている時である。

胸中鬱勃たる青春の血を湛ふるもの、誰か徒爾晏如たり得んや。

先生また新時代の脚光を浴びて、颯爽として革新行路の初程に上がつた。而してその第一声が、端なくもこの『内山峠』の一篇となつたのである。此の行、固より一商売としてのそれであつた。而も先生の家は其

の先士林に出て、世々里正を勤めた豪農であつた。

其の家風自ずから士氣を帶ぶるもの固より理の当然である。詩中『三尺の腰刀』といい、『一巻の肩書』というものの、是亦その自らなる顕現である。

此の詩後半、一転して遁世清心の士を排し、汲汲名利の客を斥けて、中間に大道の存するを示唆し、天下の万事唯だ一の誠に成るを教え、更に進んで父子の親、君臣の義、兄弟の友敬を説いて士人を戒める所、宛然是れ儒道の大經、宣なる哉、後年經典『論語』を基調とする渋沢哲学を樹立し、士魂商才の実業道大成して、天下士庶人をして率由する所を知らしめた事や、而もこの弱冠青淵子の处女作『内山峠』に早くも之を確信してその大綱を示されたるに至つては、その夙成只々驚嘆禁ずる能わざるのみである。

吾等今茲に此の名作『内山峠』を、敢えて現地内山峠の巖壁に鐫刻し、之を不朽に伝えんとするもの、是れ實に先生の遺訓を永く後昆に貽して、更に第二第三の青淵子を我が信中より輩出せしめ、以つて永く我が皇國の地の塩たらしめんとする微表に出づ、先生在天の英靈庶幾はくは天驅けりして加護を垂れ給はん事を。

翻刻者からの難解な語句の説明

徒爾晏如

ただ空しく安らかに落ち着いての意味

士林

士の仲間

里正

村長・庄屋

率由

従うこと

夙成

早くに完成すること

後昆

後の子孫

貽地

後に残すこと  
広く社会の腐敗を防ぐのに役立つ者

庶幾

乞い希うこと

## 卷末小記

維持 昭和十五年十一月、畏友小林儀助君の發願と、故先生有縁の諸君子の参襄さんじょうとに由り、茲に故先生の令孫子爵渋沢敬三閣下の允許を拝して、現地内山峠の巖壁に、本詩鑿立せんりゆうの功即ち成る。

而して不肖外祖木内芳軒、曾つて先生と蘭契の誼らんけいありし宿縁に因り、たまたまきごう偶々揮毫の榮譽を荷う。

感銘 热い勝たへん坦々我が未熟の永く金玉の遺いを冒流ぼうりゅうするものあると思ひ、慚汗さんかん転うたたた背に洽あまねしし、更に茲に不文拝註ふぶんはいちゅうの罪を重ねて真に措く所を知らず。

後学 木内敬篤 董沐合掌

### 翻刻者からの難解な語句の説明

畏友いゆう（尊敬する友人）・参襄さんじょう（助けられて行えること）・允許いんきょ（認め許されること）・

外祖がいそ（母方の祖父）・蘭契らんけい（蘭の香りのように美しい交わり）・揮毫きごう（書を書く）・

感銘きんぎよく（深い感動）・勝たへん（感情を堪えられない）・禿筆とうひつ（自身の文才の謙遜）・

金玉きんぎょく（本文から言うと、渋沢栄一の豊かな学識や才能）・遺芳いほう（同じく渋沢の後世に残る名譽・業績）・慚汗さんかん（恥じて汗の出ること）・転うたたた（ますます）・洽あまねしし（汗

がびつしより）、・不文拝註ふぶんはいちゅう（謹んで本文を解釈したが学問に暗いという謙遜）・

恐懼きょうる（おそれかし）まる）・措く所（身の置き場）

## 「内山峠」の歌

渋沢青淵先生原作

木内敬篤 国風訳

上毛野の山波とうねりて、  
かみけぬ  
西遠く信濃の山に  
そが中の内山の峠、  
かい  
利根の南の百姓青淵、  
利根の南の百姓青淵、  
物ひさぐと入るや信濃路、  
小春の八日きその眺め、  
松や楓や草鞋も軽く、  
書を背に刀を腰に、  
ふみ  
山を攀じ架橋涉り  
分け入ればいよいよ險しく  
意氣は天を目は白雲を、  
奇し岩こゝかしこに  
昼夜がりに頂上につく、  
臂を張り手に唾しつゝ、  
遠く近くつばらかに見ゆ、  
見渡せば四方晴れわたり、  
大き眺めは險しき中に、  
縦に飽かず見てゆく、  
ふと心内に閃くものあり、  
手を拍ちて叫ぶ一声、  
君見ずや彼の世捨人、  
よすてびと  
又見ずや巷の人たち、  
あけくれ  
明暮に名と利を是れ追うを、  
みな共に片々よりて、  
二つなき生終ふなる。  
道はそもそも到る所に、  
天が下たゞ誠のみ、  
父と子と將に君と臣と、  
兄は導き弟は従ふ、  
誰か知る道の近きを、  
何しとて遠きに求む、  
歌成りて高く吟へば、  
落葉捲き山鳴り渡る。

## 内山の歌

三石勝五郎 作

一、神代のむかしそのむかし 碇いかりとゞめし荒船の

不動を祭る沢に湧く 水清らけき内山よ

二、松井にひゞく鐘の音も 民安かれと正安寺

あんさか安坂近くながむれば 招くもうれし扇橋

三、大間におわす産土の 神の瑞牆かすみして

ポンボク岩の 東に 五本松城夢あはし

四、白壁みゆる園城寺 金滝山も苔むして

一、御堂みどうのあれあとに 栄えて立てるわが校よ

五、岩は疣岩疣水の 子持もこゝに水汲みて

仰げは北に天ぞそる 屏風は誰の手になりし

六、見よ耶馬渓やばけいもこゝぞよと 呟ゆるは獅子か 南みなみに

つゞる岩々さざめきて ほらのけ呼ぶは石尊か

七、中村すぎて相立の 一の鳥居に額ぬかづきぬ

八、苦水にがみす入れば 魚棲まず 木陰涼しき千ヶ滝

八、初谷しょやには湯をば探るべく 残るかをりも龜松の  
孝子の碑をば大月に とざして深き内山よ

皇紀二千六百年秋

平成七年二月二五日

木内 靖 誌るす